

市民全員がまちを知り、まちを語るような都市を目指して欲しい。

—— 劇団「ギンギラ太陽's」主宰 大塚ムネト氏



大塚 ムネト(おおつか むねと)

1997年より劇団「ギンギラ太陽's」主宰。流通や交通などの業界を対象に徹底的に取材した物語や、役者たちのユニークなかぶりモノで有名。

地元に着した舞台を展開され、作・演出はもちろん役者、造形師としてもご活躍中。

心地よい「ほどほどさ」が変わり始めた 25年

福岡を戦国時代の武将の城に例えると、城を守る武将の力でできたというよりも、地の利に恵まれてできた城ではないかなと思います。福岡大学の田村馨先生も言われていましたが、正に“ラッキー都市”であって、攻めて築いたものではなく地の利に恵まれて発展してきた都市だと感じています。

幼少時は小都市に住んでいて、休日に福岡へ出かけることを大変楽しみにしていました。福岡へ行けば何でもありました。海や山に行くにも電車で福岡まで行けば宮地岳線に乗り換えたり、志賀島に行けたりできるし、バスに乗りかえて山へも行ける。色んなことが福岡から始まっていて、憧れの場所であり、大変楽しい場所でした。

母方の故郷が東京で、東京と言っても江戸川区鹿骨というところで、どうかすれば福岡よりも田舎なのですが、夏休みになるとよくそこへ行きました。今にして思えば色んなものが東京都心に集まり始めていた時期で、秋葉原、渋谷、新宿などが近くて色んなものがすぐそばにありましたが、どこかへ行って何かをやろうとす

ると、とにかく人が溢れていて大変で、一日がかりでヘトヘトになるという場所でした。そんな体験から福岡に都会の良さを感じ、逆に東京に田舎の部分を感じるような福岡優位の逆転した目線を持つようになりました。

そんな思いを抱いていた福岡の見方が変わったのは、平成元年の第二次流通戦争あたりからでした。ギンギラ太陽'sの活動を通して特に福岡のまちを意識して観察していましたが、丁度他の都市から色んな人が集まりだして福岡に住んでいる人達のものだけではなくてきた時期と重なるかなと思います。福岡の人達が過ごすにはとても心地よいキャパシティであったのに、道路が通りにくかったり、自転車がなくて危なかったり、休みの日は渋滞で車が動かなかったりと、ほどほどの良さが失われ、このままだとどこに向かっていくのか心配になりました。

具体的に動きリーダーシップを発揮する 25年

ワクワク感を期待して九州各地からやって来る若者や買い物客の情熱を少しずつもらいながら、福岡は今のポジションをキープしてい

るわけですが、一方では九州各地の人達の疲弊はどんどん進んでいるように思います。どうしたら都市に人が集まるかとか人の流失を防げるかなどを、まだ切実に悩まず色んなことを考える余裕がある今の段階で、いかに勝ち続ける都市にしていくか作戦を考えなければなりません。

そのためには、市民みんなが参加して意見を集めて叩いて揉んで、福岡モデルと言われるような何か思い切りの良い突き抜けた政策を実行できないものかと思います。当然、それは福岡だけではなく九州全体とつながっているものであるべきで、福岡だけが勝利するような都市の生き残り方はあり得ないと思います。漠然とキーワードを語るのではなく、まちづくりや人々の住みやすさ、あるいはまちの文化活動など色々な面で、福岡がリーダーシップをとって九州の中で何をどうやるかを具体的に突き進めて考えていく段階にさしかかっていると思います。

芸所福岡では「出る杭」は受け入れられる

文化の点から言えば、私は演劇者ですが、美術など他の表現者も含めて、福岡に来れば何か出来るのではないかと、また人との良い出会いがあるのではないかと、といったワクワク感を持つことがとても大切だと思います。福岡で活動が続けるもよし、次の場所へステップアップするもよし、大切なことは福岡が魅力を発信し続けて人が集まる場所であることだと思います。

ギンギラ太陽'sの活動を始めた頃は、東京や大阪から来る舞台は観るけど、地元の舞台には関心がないといった風潮もありました。確かに東京や大阪から来るもので良いものも多いので否定はしませんが、地元のものに目が向けられないことを歯痒くも思いました。そんな中、演劇や芝居を観る習慣のきっかけとなった博多座やシティ劇場ができたことは大きかった

と思います。私の芝居でも、それまでとは違った観客層がご来場されるようになりました。

ギンギラ太陽'sでは地元でしかできない、地元の方にだけ楽しんで頂けるエンターテイメントを目指して活動して来ました。市役所や天神のデパートや交通があるまちをそのまま表現してまちの物語を創って来ました。各キャラクターの許可を取らずに公演活動が続けて来ましたので、どこかで怒られるかとも思いますが、「徹底的にやらないと福岡の方々に認めて頂けない」と覚悟を決めて活動を続けて来ました。不安もありましたが、反応が良く、喜んでもらっている実感があって、福岡の方々は本当に福岡が大好きなんだと感じ続けています。芝居の後のアンケート回収では8割位の観客の皆さん方からの反応があります。色んなご意見がありますが、まちと自分達のことを感じている人達もたくさんいることを実感します。私たちのまちの物語を通して自分達のまちを共有したいという思いが強く感じられ、驚きとともにいつも非常に嬉しく思っています。

劇団を立ち上げてから12年目になりますが、登場する各企業の皆様方から怒られるどころか、節目で呼んで頂けるような良い関係が築けていると思っています。どんたくでは西鉄どんたく隊と一緒に参加していますし、新しく福岡に出店する関係者の方が「ギンギラに出るかな」とツイッターでつぶやいているのを見ると、一緒になって楽しんでもらっている芸所福岡の懐の深さを感じてしまいます。「出る杭」を受け入れる体質や環境が福岡にはあって、市民に限らず行政や企業など色々な立場の人達はその立場で物事を進めていくキャパシティの素敵さが福岡の強みであり、これからもどんどん磨いて行って欲しいと思います。こんなことは他の都市では多分あり得ないことではないでしょうか。

福岡、九州、アジアを海でつなぐ

私の公演を釜山の演劇関係者が観に来られたり、韓国内でものすごく頑張って勝ち抜いて日本進出しているアーティストなどを見ると、演劇に対する韓国の熱い思いを感じてしまいます。福岡から東京・大阪へ出るルートも大事ですが、アジアの玄関口として、福岡にしか担えないアジアの窓口ができそうな気がします。福岡から東京・大阪に行って韓国へ行くのではなく、福岡で頑張って認められれば韓国へ行けるようなルートができないでしょうか。演劇に限らず音楽、美術などの文化全般でそのようなものができれば、文化交流はもちろんのこと、観光資源にもなり得ると思います。

福岡は昔から人が流れて交わり、ここで形になって更に広がっていった交流の要の地です。福岡で活動することが、九州全体とつながって、アジアで活動できるきっかけとなるような具体的な仕掛けができれば、今よりもっとワクワクできて頑張ろうと思える「出る杭」をもっと活かせる場所にできそうな気がします。

横浜の港の見える丘公園などは、海を使って上手くムードづくりをして観光スポットとして活用しています。福岡は身近に海があるのに十分活用されていないように感じています。地元の人達が大切にしている心地良い海と、アジア各地から福岡を訪れる人達から喜ばれる海は両立できる存在のはずです。

昔から海は交流に欠かせない存在でありませう。海をエンターテインメントの場として、九州やアジア各地から表現者達を集め、福岡、韓国、中国の海に面する都市を船でつなぐようなアジア文化祭的な仕掛けができれば非常に楽しいと思います。私達が心地よいと感じる海は、福岡を訪れる人達にとってもきっと心地よいものになるはずですよ。

改めて25年前を思い返すと、福岡に住みながらも正直まちづくりのことは意識していま

せんでした。福岡のまちと向き合っただけでまちと自分を考えるきっかけとなったのは、やはりギンギラ太陽'sの活動を通し表現者としてこのまちで生きていきたいと思った時からでした。私が体験したようなそんなきっかけを一般の人達にも感じてもらうにはどうしたら良いでしょうか。何でもイベントに結びつけると怒られるかもしれませんが、25年に1回のお祭りとして新ビジョンづくりを進めてはどうでしょうか。自分が考えたことや発言したことが、これからのまちに影響するかもしれないということはワクワクして大変楽しいことだと思います。

学生や子育て中の人、年配の人など、それぞれの立場だからこそ気づくことを幅広く集めることはとても大切だと思います。日々を追われていると、まちは勝手に生まれて勝手に進んでいくもので、自分自身とは一定の距離感があるような錯覚に囚われるかもしれませんが、決してそうではなく、一人ひとりのことが合わさって初めて一つのまちが創り上げられるわけですから、たくさんの人達が積極的に集まるものにできたら良いと思います。

福岡のまちを語ることを許され、認められた語り部として、感謝の気持ちと責任を感じながら作品を通して福岡のまちと住んでいる人達の物語を表現することで、多くの人達がまちづくりにもっと関心を寄せてもらえば大変嬉しく思います。

情報共有の仕組みがあれば意識が変わる

自分が知らない色んなまちの物語と出会うきっかけがあれば、福岡を良くしようという意識がもっと高まるのではないかと思います。

私は作品に登場させる建物の取材を通して、現場を支えている人達の苦労や思いを知り、今まで何気なかったものに愛着がわくようになりました。今まで通り過ぎていた店についても、

創業者の思いを知り、いかにまちを支えていて来たかを知るにつれ、とても愛しい違うものになってきます。新学期の居心地の悪いクラスにいるような感覚ではなく、知れば知る程仲良く、ぐっと身近な仲間のような存在になってきます。自宅と会社を往復するだけではなく、駅や電車や道路などに愛着を感じるそれぞれの物語があれば、福岡への思いは必ず変わってくるはずです。

例えば誕生日はその人にとっては特別な日ですが、他の人にとっては特段意識する日ではなかったりします。6月19日は福岡大空襲があった日で、雨が降るように焼夷弾が落ちてきたという話を聞いて、その日を意識するようになり、梅雨時の雨を見ながら、こんな風に焼夷弾が落ちてきたのかと感じるようになりました。その様に、福岡のことを思い考える「まちの歴史を感じる日」のようなみんなが共有できる日を設けてみることもおもしろいと思います。どんたくや山笠のような祭りで盛り上がる楽しい日ももっとあって良いと思いますが、悔しいことや悲しいことがあったことを感じる日もあって良いと思います。

上野動物園の象がいなくなったことや、東京大空襲のことを描いた映画などを小学校で集まって観た記憶がありますが、福岡には福岡が体験してきた大切な歴史や物語があるわけで、そういうことをもっと伝えるべきではないでしょうか。戦後復興のなかで、子供達が喜ぶようにと、中洲の玉屋さんが象をデパートの屋上に持ってきた歴史があるからこそ、山笠の中洲流が途中でルートを変えて玉屋さんの前で祝いめでたを唄い、長年の地域への貢献に感謝を示し、玉屋さんはそれを見届ける形で閉店を迎えています。

このような素敵な歴史や物語は他にもたくさんあるはずです。記録さえなく語られていないようなことでも、まちにとってはとても大切

な財産になり得ると思います。そのようなものを記録したり語ったりする仕掛けがあって伝えることができれば、市民の意識は変わってくると思います。

市民会館の建て替えに際し、私は福岡の歴史アーカイブのようなものがないか検討することを提言しています。福岡で生まれ、東京で花開き、世界中で活躍し、近代演芸の礎を築いた川上音二郎にスポットをあてるなど、福岡の歴史をアーカイブすることによって、福岡の偉人・名人に限らず、色んな人物を対象に観光財産が発掘できると感じています。

また、過去の人物だけでなく、博多駅で挨拶を続けているお巡りさんなども、福岡を元気に楽しくしてくれていますし、他にもそんなすごい人はいっぱいいると思います。

そんな情報を共有できる仕組みができれば、福岡市民みんなが福岡のこれからの持続的に考えていく素地になっていくのではないのでしょうか。元気がある今だからこそ、気付いていない福岡らしさを発見し、行政と民間みんなで意見を出し合う議論ができると思います。

インタビュー日:2011/7/19 文責:URC 栗原